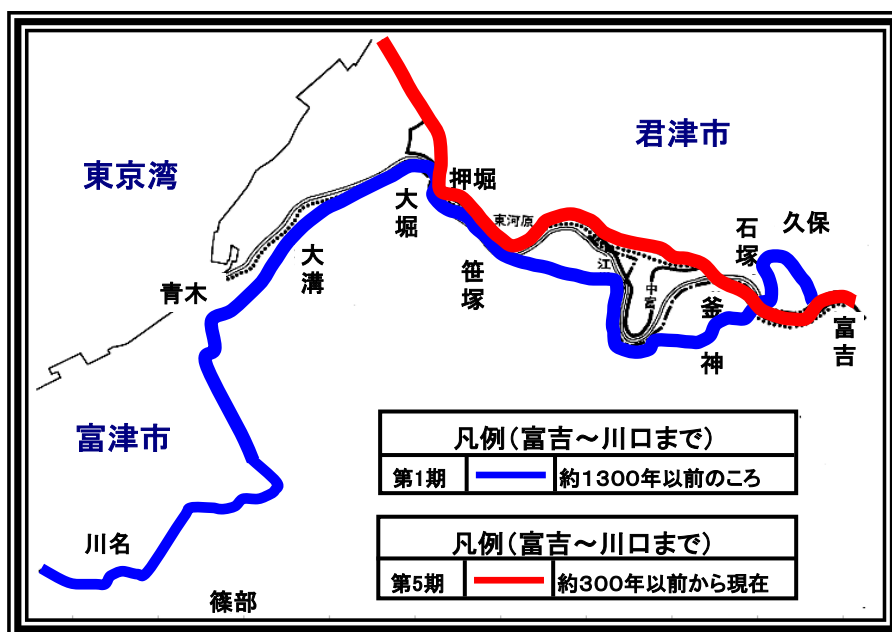




第Ⅰ編

暴れ川の歴史



第 I 編図：小糸川流路の変遷

－第1期と第5期の比較－

君津町誌・前編

(1) 水源から東京湾まで君津一筋

小糸川は、房総の屋根といわれる自然豊かな房総丘陵地の清澄山系、高宕山系の北斜面を源流として西北へ流れ、鹿野山の北側を蛇行しながら小糸地区を横断し、君津地区に入り、その間に支流と合流して東京湾に注いでいる。

源流(※1)は、清和県民の森一帯である。年間の雨量が2000mmを超える県内多雨量地域の水を集め、木和田川(※2)から豊英湖に入り、三間川(※3)が三島湖で合流して水量を豊かにし、その下流で、高宕川(※4)、鹿野沢川、梨ノ木川(※5)、折木沢川を合流し、秋元地区からは西方に向きを変え、馬登川、宮下川、江川、^{ドウメキガワ}百目木川(富津市域)などを合流して東京湾に注いでいる。

小糸川は、その全流域が君津市にあって、流路総延長は約80km、流域面積は148.7平方kmに及ぶ房総第三位の川で(1位小櫃川、2位養老川)、灌漑用水並びに工業用水水源として重要な役割を果たしている二級河川である。

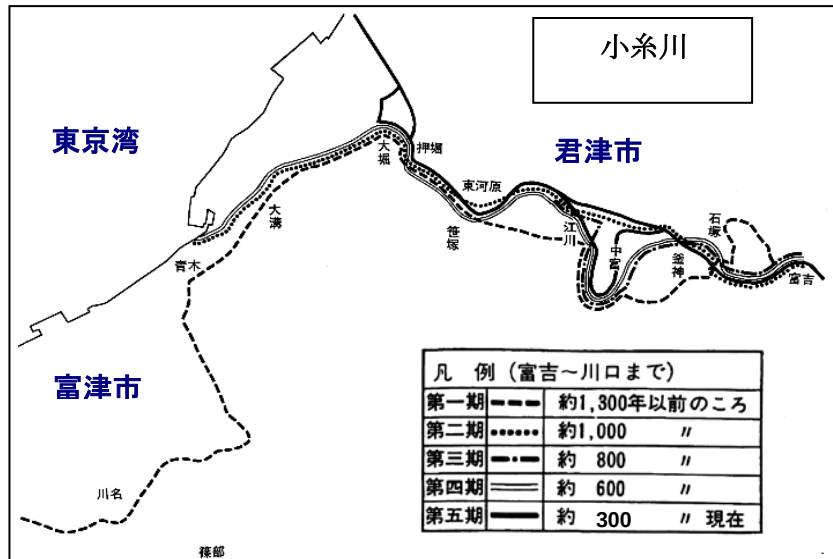


小糸川は、人見川あるいは秋元川とも呼ばれていたと言われるが、小糸川という呼び名が、いつの時点で定着したかは明らかではないようだ。『義経記』巻三では「すへかは」と呼び、大久保忠易が元禄12年(1699)に作った領地絵図の周東郡部には周淮川とあり、周西郡部には小糸川とある。(『大日本国誌』)

(2) 5回に及ぶ流路変遷

小糸川は、平常は穏やかで静かな流れなのに、ひとたび豪雨ともなれば、下流にある低地一帯に大洪水をもたらし、何度も川の流れを変えてきた。

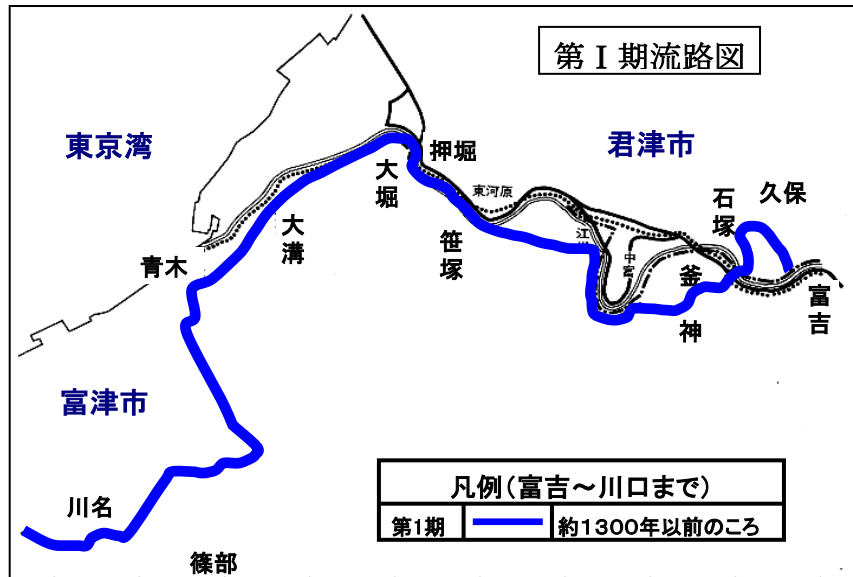
小糸川は、高宕山系及び鹿野山から三舟山に連なる山間部、清和・小糸丘陵を経て三直・人見に至る丘陵地の間の平地（周西平野）を流れ、地層の柔らかな土地はこれを深く侵食し長い年月を経て蛇行の多い河川として自然形成された。上流は近世、川回しなどにより耕作地に転用されてきたが、その流路の変遷は明らかでない。ここでは地域資料等で明らかにされた下流部（富久橋以下）のみ言及していきたい。



第一期（1300年以前）

奈良時代より以前は、現在支流である江川が一部小糸川の本流であり、河口は富津の州の南下方から東京湾に注いでいた。

久保の上川田、中川田、下川田を今より北の方を迂回し、中野の上川田、下川田、沢尻より釜神の宿の東で江川と合流し、上湯江の江口より下湯江の江口、神田、古川跡、根田より富津の大堀、大溝、青木と流れ、川名、篠部を経て東京湾に注いだ。



第二期（約1000年前）

流路は劇的に変化、短縮される。富津市青木付近で海に注ぐことになる。

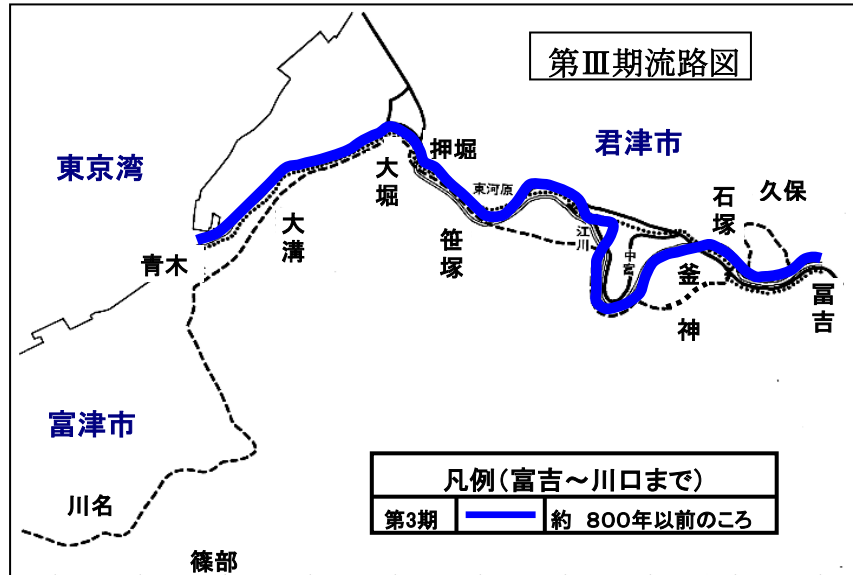
久保の鹿島台南、富吉の北辺一帯を流れ、中野の沢尻、曲田、西川田、新川田を流れ下湯江の外割（水揚場付近）を流れ下河原より人見の東河原、西河原、下新田を経て、中橋付近から富津市の大堀、大溝を流れ、やや北により、末川を流れ鯨州の東より海に注ぐ。



第三期（約800年前）

中野の曲田の上から釜神の芝、二軒屋の西側より、中富の江川端、古川跡、門樋下、南川原、西宮下を流れ、下湯江の入地と中富の新川端の境界付近を流れ、中野の新川端より下湯江の外割に流れたこともある。

人見の新川田、鳥居戸、押堀を経て中橋付近から大溝を経て前の川筋より一層北にそれて東京湾に注いだ。



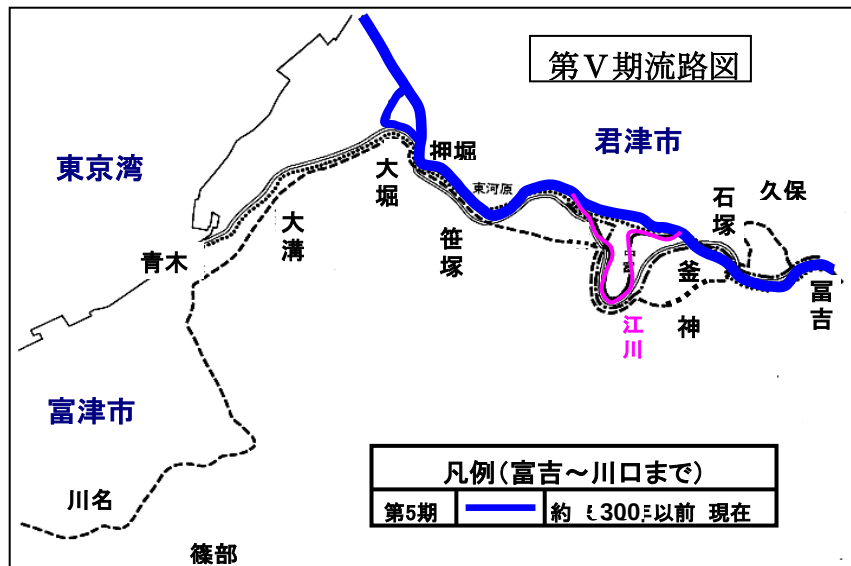
第四期（約600年前）

さらに時代は下って、中富の西宮下から下湯江の中割、下河原を流れ、人見の新川田、鳥居戸、押堀を流れ中橋付近から大溝を経て、前の川筋より北にそれて海に注ぐ。小糸川が砂泥を運搬しながら南西方向へ流れ、河口が次第に西方へ、そして現在の北方向に流路を変えてきたことが推察できる。



第五期（約500年前）

中富の金堀から東河原、古川跡、門桶下、南河原、溝上の南部を流れたが、段々、金堀、東河原辺りは西に移動して、砂田、古川跡から下湯江の古川跡境を通り、中富の西川跡、下湯江の下川田から中割の外割寄りを流れ、凡そ300年前には今の流れに近くなって、下河原付近は北に移動して「ガラン」に近づき、人見の高芝に押さえられ南に曲がり笹塚の台地に突き当たって人見の新川田辺りの流れは北に変わり、中橋付近から大堀に入ったのが、北部に移動し（喜楽館付近）、大堀と人見の境辺りを西へ流れ、現在の本流に近くなってきた。



ー トピックス ー

小櫃川・養老川の河口は沖積低地であり、典型的な円弧状の三角州を形成していた。
(『千葉県自然誌 本編2・千葉県の大地』)

おそらく小糸川河口も同様の砂質の三角州を形成していたと思われる。その流域面積は現木更津市小浜海岸から富津岬にかけての広大な流域であったと推測される。

しかし、小糸川の流路の変動により大幅に狭められ、現在は小櫃川流域面積のほぼ半分にすぎない。富津州の形成について明確な記述がないので、関連する文献の記述を紹介することにする。

『富津市史』では、次のように記述している。「市北部の低平な地域は沖積平野で、小糸川の三角州や特異な尖角砂州である富津州が作られている。富津州は、小糸川の流路の変遷や潮流の営力で作られたもので、基部から6キロも突き出ている。関東大震災で、第一海堡まで陸続きになったが、現在は離れ、先端部が北方へ僅かに湾曲している」

富津岬が形成されたのはいつごろなのか定かではないが、約6千年前と『富津市史』はいう。「2万～1万5千年前に海退により、古東京川ができ竹岡の沖合いまで続いた。小糸川は古市場（釜神付近）から川名に出て、観音崎沖で古東京川と合流した」とあり、「富津岬や中の瀬の砂や泥の下には第三紀層（6～5千年前）があることから、おそらく富津州の形成は6千年前頃から形成されたとしている。

『改定房総叢書 第4巻』に収められた安川柳溪著「上総国誌」によれば、

- ・「又、本州 海中に出ずること2里ばかり。故に巨舟を浮かぶる者常に懼れて而之を避く」
- ・「富津州は古津に誤る也。其の州觜出つること海中に一里半ばかり。相州のは走水與犬牙相對す其間三里ばかり。航路尤も近しと。浅渚遠く出で、舟に棹して行く宜しく。其深き処は讒に一里半許。故に太古相模国より上総に航する必ず此海面自ず。日本武尊の東征の如きも亦然り」などとある。



（昭和12年発行の地形図） 1/50,000



（昭和43年発行の地形図） 1/50,000



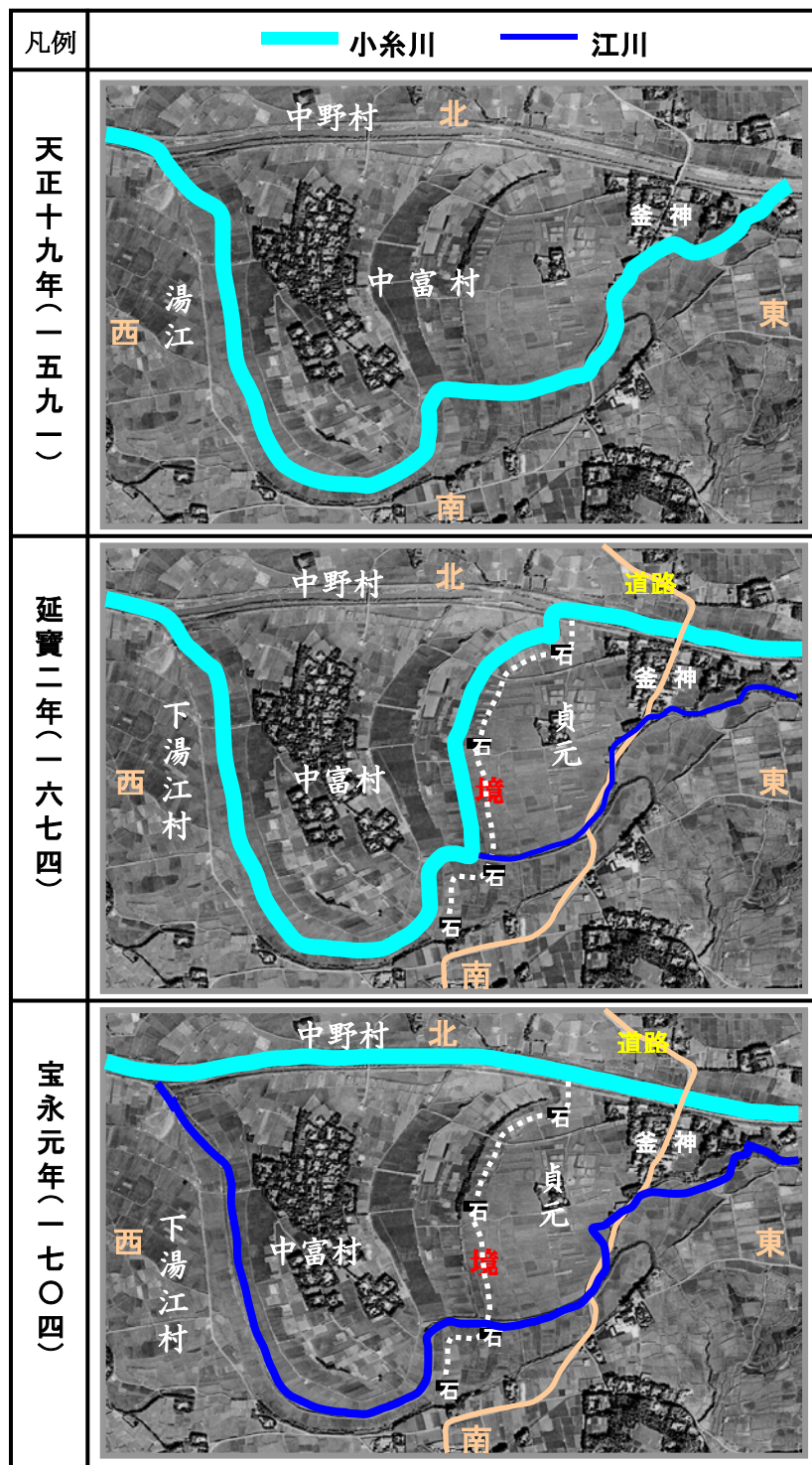
* 資料出典:天羽高等学校開放講座資料(8/7)

2. 流路の変遷と中富村

天正19年（1591）、延寶2年（1674）、宝永元年（1704）における中富村の歴史を航空写真で比較すると、氾濫による流路の変遷が確認できる。

（参考資料：郷土研究誌”呦呦”第7号 石川 昭氏論文より）

*航空写真提供（昭和39年版）：国交省国土地理院鹿野山測地観測所 大滝氏



3. 流路の変遷に伴う境界紛争

小糸川は房総最多雨量地域を上流部に抱えるため、一日の雨量が200～300ミリに達すると、中・下流域の古い流路は大洪水となるが多かった。洪水のあと流路は大きく変化した。それをめぐって深刻な村境争論が各地で持ち上がった。

以下、小糸川下流域各地の村境争論を『君津市史』から抽出して紹介する。

(1) 人見村・大堀村（現富津市）

慶長元年（1596）、同2年、この兩年の大水で大堀村側が決壊し、本川と押し切れ目の間に川瀬ができた。折から村々に百姓の見立てによって新田開発の奨励が触れられていたという。そこで人見村の百姓がいち早くその川瀬に鍬目をつけ新畠を開いた。そのため、大堀村では自分の地内であると訴えて争論となった。

両村は代官所に向かうため木更津まで来たところ、木更津の町人衆が仲裁に入り、手形をして境目は「前々の通り・・・」ということで内済したという。

そのときの「境は前々のごとく」という認識が両村ともはっきりせず、大堀村の主張によれば、人見村の村境の言い分は、海の端10町ほど沖にある「大根」といったり、大堀村地内の「鯨州」といったり、大堀村が植えた松が境といったり、二転三転している。

正保3年（1646）には再び河口の変化で両村の境が不分明となり、大堀村の百姓が人見浦で盗み網を引いたとして訴えたことから再び争論が持ち上がった。

『郷境争論返答書写』^{ゴウサカイソウロンヘントウショウツ} 守家文書によれば、寛文4年（1664）にもこの両村は

甲斐門限前門月四日	大堀村	豊彦辰之に仕之、自今以後、鑑絵	反之拾貳、有之、此畠者、如前大堀	其間、之へれ、右方、向後、大堀村之畑	なり、西な候、方、河筋、をきり、	なかり、然、古、河筋、南、境、者、東、	論、地、内、有、之、旨、是、南、境、者、北、	証、文、雖、有、之、大、堀、村、之、百、姓、申、事、	令、糾、明、之、人、見、村、大、堀、村、之、境、論、之、所、	上、総、国、人、見、村、大、堀、村、之、境、論、之、事、
-----------	-----	-----------------	------------------	--------------------	------------------	---------------------	------------------------	----------------------------	--------------------------------	------------------------------

村境をめぐって争い、評定所の裁許を得ている。この裁許によって絵図面上に境が示され、以後両村の村境が確定された。なお、両村の境で区切られた中間の浦は双方の入会地とされ、また、その中に大堀村が開発した畠はそれまでのように大堀村がこれを作ることとなった。

しかし、以後この入会地での両村の開発が禁止されることになる。



寛文4年 人見村と大堀村村境争論裁許絵図面

(2) 中富村・貞元村

寛文2年（1662）9月、中富村と貞元村の村境争論に、幕府の裁許が示された。この事件は、小糸川が中富村内へ欠け入り、同村と境を接した貞元村に中富村の地が寄り付いたとして中富村を訴えたものである。しかし裁許では、貞元村の田畑ばかりで中富村の田畑はないと断定され、小糸川の流れのとおり、両村の境とする判断が示された。この幕府の「境は水流に限る」という判断は、当時幕府の裁許の基本であった。しかし、寄り付いた土地にも作物があり、それが確かに川欠けした村のものと確認できる場合には飛び地として認定されることもあった。

中富村は当時、小糸川が大きく蛇行して村を巡っており、大水のたびに川欠けの被害にあった。そのためこの後も隣村の村々との間で境論争を起こしている。

元禄期に至って洪水を防ぐため、小糸川の本流を短絡させ、流れを直流させたが、中富村は宝暦13年（1763）にも下湯江村と村境争論を起こしており、『附州論裁許状写』中富村自治会文書によると、中富一帯は洪水による河道の変化が著しかったことがわかる。

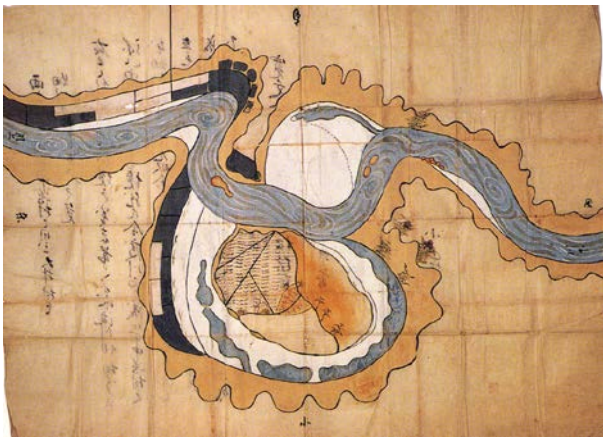
寛文 式年 壬寅 九月 廿二 日	井賀村渡岡妻右衛門 河甲長大豊前門 内斐門隈前門 印印印印印印	双方へ如此証文遺置之者也 通兩村之境無相定之畢、為鑑 田畑一切無之、上者、小糸川 貞元村今川向有之、而中富村 地内只今川向有之、由雖訴之、 中富村の方へ闕入候付、中富村 境論之事、令糾明之處、小糸川 上総国周集郡中富村与貞元村
---------------------------------	--	--

(3) 中島村・大井村

寛文8年（1668）3月、中流の中島村と大井村との間でも川欠けによる境争論が起き裁許が示された。

『郷境争論覚』大井区有文書によると、この事件では、大水で小糸川の流れが変わり、中島村の田畑が欠け崩れ、右岸の大井村に組み付いたため中島村が自村の地であることを主張して訴えたものである。

裁許では、従来〔水流川切り〕に境とするべきであるが、中島村が訴えたとおりに同村の本畑・新畑合わせて五反九畝余りのところに立毛が確認され、この立毛のある部分は中島村地内と判断された。しかし、立毛のない川原となった部分は大井村の支配とされ、この事件は決着している。



寛文8年 中島村と大井村境論裁許

西上総国周集郡中嶋村与同国大井村与
畑川欠郷境出入之覚
右令糾明之処、郷境之義者、前々 水流
川切ニ相聞候、弥以雨後之水筋可為境、
然共今度川向に成候所、中嶋村之本畑
新畑合五反九畝余之処立毛有之由中嶋
村
之者訴之、立毛有之分者、中嶋村之可為
地内、尤立毛無之川原ニ成候分者大井村
之可為支配、仍当役鑑絵図裏判双方江下
置者也
寛文八年戊申三月六日
岡 松
越 猪
前 右

4. 河川改修(君津地域)

(1) 大草平内の川回し

小糸川は釜神から中富を取り囲むように流れていたため、中富村は大雨のたびに洪水の被害を受け難儀していた。

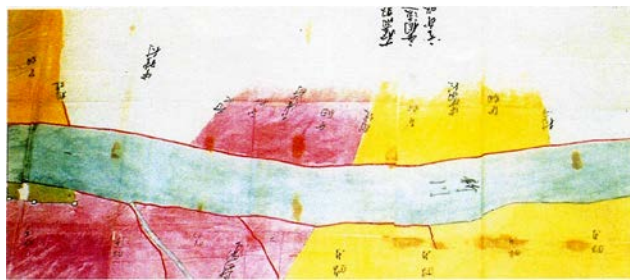
特に元禄3年(1690)9月7日、未曾有の大洪水に大きな被害をこうむった。翌年4月の「物成皆損免状写」によれば、「当午年洪水ニ而、田畑作物不残水くさりニ付、当物成赦免者也 元禄3年午11月15日」とあるように被害は甚大であった。

小糸川を直流させることで洪水の被害を軽減させようと、遂に地頭大草平内を通じて、お上に苦衷を訴え出ていたのであるが、なかなか聴許されなかった。大草平内の尽力もあって、元禄15年(1702)の願い出に対しようやく許され、中富の金堀の河口を閉ざし、新たに下湯江の入地まで掘削して人為的に川筋を変え江川を分離して流すことに成功した。釜神から距離468m、工事に着工してから3年目の宝永元年(1704)新しい小糸川が完成した。

その後、小糸川は次第に河床が低くなり、堤防もやや整ったので大水のとき川岸を挟むように崩れたり、堤防を押し切って中富に食い込んだことはあっても、川筋を変えることはなくなった。



新川掘削場所願い絵図 元禄14年(1701)



新川完成 宝永6年(1709)

〔大草平内〕

大草平内は、元禄時代（1688～1703）、中富村の水害による惨状を憐れみ、年貢の減免や救援米で村人を救ってくれた恩人である。

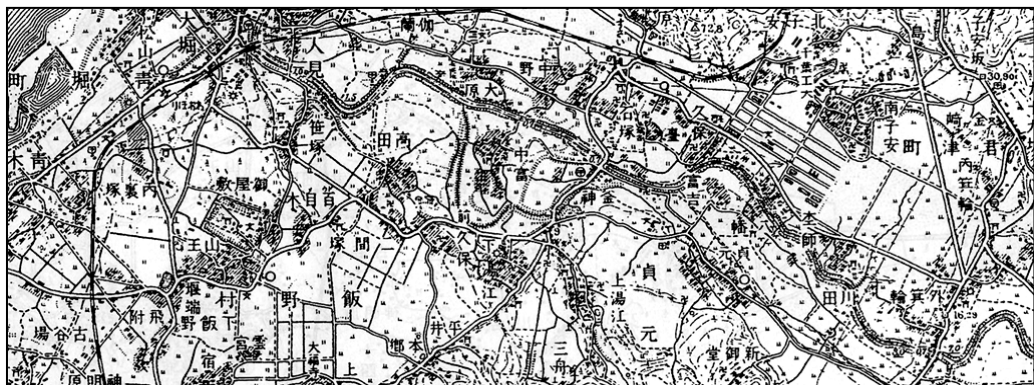
寛永17年（1640）に上総国周准郡に生まれ、周西地域の領主旗本小笠原彦太夫長住の家臣で人見村に住み、中富村の地頭（土地を管理し租税を徴収する役職）であった。元禄4年（1691）小笠原氏の転封で彼もまた地頭職を辞する。

元禄3年（1690）9月、かつてない大洪水に見舞われ、中富村は母屋のひさしまで水が上がり、田畑は砂で埋まり、作物は全滅という大被害を蒙った。度重なる洪水から中富を救うには、小糸川を釜神から直線にするよりほかに方法がないと考え、掘削工事のことや完成後の川跡の処理の問題を上司に願い出たが、その願いが成就する前に、元禄12年（1699）12月12日60歳にて歿した。

その後元禄15年4月、新川掘削を中富村と下湯江村とが連盟で、略図を添えて願い出て許可され、村中総出で工事作業に当たり、3年後に完成した。

中富村の人々は、新川の完成により、洪水も減り、収穫も増え生活が楽になったことに感謝をこめ、富西寺境内に大草平内の木造を安置し、

ところで小糸川と分離された江川は、下湯江と中富の間で合議の結果、川幅を決め堤防（土手）を築いて昔の川跡をそれぞれ耕地に開墾したが、数年ならずして釜神、中富、下湯江のいずれかで土手が決壊し、作物の収穫ができない事態が繰り返

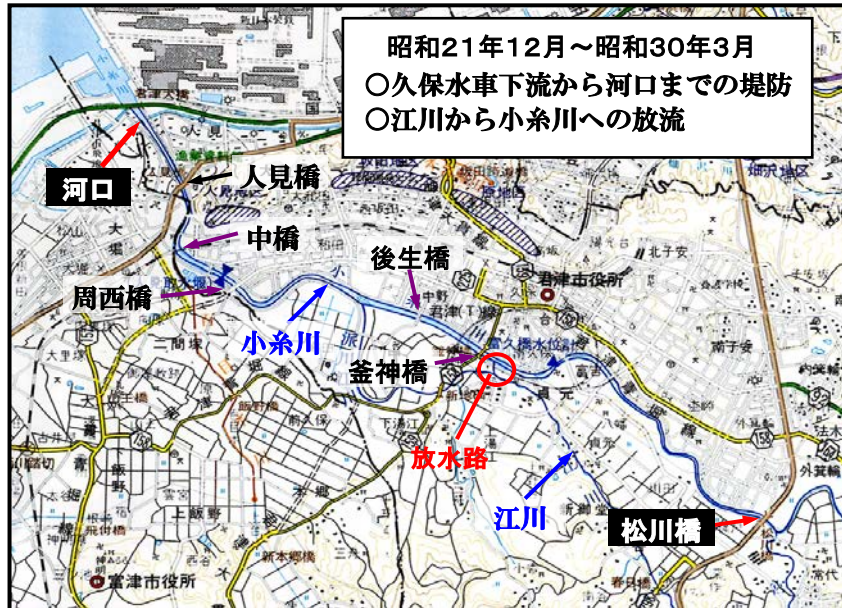


昭和27年(1952)頃の地図

された。たとえお上の助成を仰いだとしても、地元の負担は少々のことではない。そこで神将寺の下において小糸川へ放流することがたびたび要請されたが、釜神の住民から小糸川本流の水かさが増し、危険が増大するとの理由で反対があつて、遂に実現できなかった。

(2) 昭和20年代の第1次改修工事

昭和11年(1936)、貞元村原徳治(四郎治)県議は、小糸川の改修と江川放流工事の実施を唱え、県を動かして国の力によって完成しようとしたが、戦争激化もあり遂に実を結ばなかった。



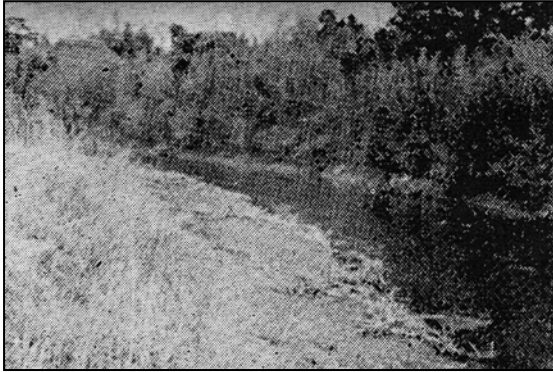
戦後に原氏は再び運動を起こし、時の県議や貞元村長とともに県の各機関に働きかけ対岸の君津町長もまた小糸川改修を請願しており、県もようよう動き出して、失業対策事業の一環として実施することとして調査測量が始まった。



江川一小糸川放水路拡大図

昭和21年(1946)12月1日、いよいよ国費により県直営を以って久保の水車の下から河口に至る大改修工事に着工、9年の歳月を費やし昭和30年(1955)3月31日に竣工した。そして多年にわたり論議された江川も神将寺の上に放水路が新設され、下湯江と中富は江川による水害から逃れることができ、小糸川の本流も屈曲がなくなり、州が除かれ堤防を築き、護岸を厳にせられ、永年にわたる水の災害から救われることになった、と『君津町誌』に記されている。

しかしながらその後においても豪雨の際は増水により堤防の決壊、または河川沿いの低い耕地などは冠水の被害を受けた。



河川改修前の小糸川



河川改修後の小糸川

- ・ 当初計画 . . . 人見橋付近から上流の六三橋までの間
- ・ 変更計画 . . . 人見橋付近から上流久保八幡地先まで、及び人見橋から海に向かった両岸の護岸工事
- ・ 工事内容 . . . 右岸延長 5, 686メートル
左岸延長 6, 477メートル
築堤総土量256, 846立方メートル
- ・ 工費 1億8, 382万4千円

なお、改修工事の進行に伴って、人見橋、中橋、周西橋、

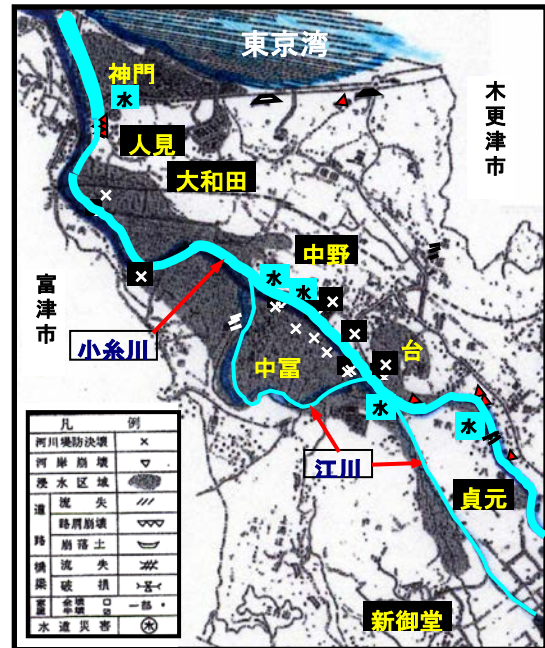
(3) 第2次改修工事

昭和45年7月1日～2日にかけて房総南部丘陵地は局地的集中豪雨に見舞われ、小糸川は流域各地で氾濫し、堤防は決壊して、家屋冠水、橋梁流失、耕地冠水・埋没等甚大な被害をもたらした。

(『小糸川倶楽部平成15年記録集』
第1編参照)

千葉県は、小糸川の一連の治水・利水の効果を得るため、抜本的な補修事業を実施すべきとの方針を決定し、災害復旧助成事業で施工することとなった。

当時八幡製鉄君津工場の進出に伴い、君津地区では土地開発が進み、各地域に土地区画整理組合が設立されつつあった(大和田、坂田、久保、久保山の4組合は設立済み。南子安、杵師、中野、宮下、箕輪、人見は設立準備中)。その中で小糸川に接していた組合は、久保、杵師、中野、箕輪、人見である。集中豪雨時以前に設立され、すでに盛土工事が進行していた久保や坂田土地区画整理組合の被害は甚大であった。



昭和45年災害状況図(小糸川下流域)

- ・着工……昭和46年3月5日
- ・竣工……昭和49年9月30日
- ・計画幅員…24m～34m
- ・計画流量…700立方m/秒
(降雨確率=40年/1回日雨量=286.3ミリ)
- ・工事延長…12、167m
(人見橋より上流の中村橋までの間)

災害復旧工事に關し、千葉県から君津町、土地区画整理組合（設立準備組合を含む）、および利害関係者に対し説明会が行われた。その際に取り分けて論点になったのは堤防の高さの問題であった。

県は、既存の河川幅員を変えることなく、既設の堤防を嵩上げし、計画流出量を確保する意向を伝えた。これは区画整理組合側の事業の基幹である排水計画、および君津町当局が進めている都市基盤整備全体に重大な影響を及ぼすことから、河川の拡幅を申し入れると同時に、拡幅に必要な用地について全面的に協力することで合意に至った（「久保区画整理組合記念誌『瑞雲』」）。

※拡幅用地に協力した組合および面積

- ・久保土地区画整理組合・・・・・・ 7, 163平方メートル
 - ・杣師土地区画整理組合・・・・・・ 22, 046平方メートル
 - ・中野土地区画整理組合・・・・・・ 13, 008平方メートル
- なお、箕輪・人見土地区画整理組合については、災害復旧工事

航空写真による第2次河川改修前後の比較

場所：大和田・人見付近



昭和39年航空写真(1964)



昭和49年航空写真(1974)

小糸川の源流・支流

—広報きみつに掲載された「君津清流探訪」より抜粋—

※1 源流

(文 吉原洋氏)

小糸川本流の源流部は、君津市と鴨川市を分ける山系の尚武山麓から流れ出て、激しい蛇行を繰り返しながら国道410号沿いに北上し、奥畑地区の豊英湖に流入します。源流域は「清和県民の森」の区域で、「森林館」付近では深くえぐれたU字谷になっている。岩盤は市域の古い地層の一つである天津層で、河床では泥岩層を主に砂層や白い凝灰岩などだ。亦、岩の割れ目から湧き出す鉱泉と、白い硫黄の沈殿（ゆわた）がいくつもある。小さなよどみや岩のくぼみでは、ウグイ・ギバチ・シマドジョウ・ヨシノボリなどの魚類や、モリアオガエル・タゴガエル・カジカなどが棲み、植物も豊富で、谷に下りる林の中の樹木には、名札もつけられています。

※2 木和田川

(文 鈴木欣也氏)

小糸川上流部の支流木和田川（松節川）は、房総丘陵の安房高山を分水嶺とした北側の深い谷あいをもつ清流で、豊英湖の木和田橋付近で小糸川に合流しています。

この溪流の見どころは「豊英の大滝」で、落差が7.5mと2.5m。幅が約20mの2段の滝です。近づくと厚い砂岩層に泥岩、凝灰岩の層を挟む（清澄層）岩盤に懸かる滝から、流水の音が響いてきます。ヒノキ林から河床に下りると正面に切り立った白い岩肌が続く、色づいた葉に光が差し込み味わいのある景観です。ここは「清和県民の森」の一画で、遊歩道、関東ふれあいの道やキャンプ場、ミツバツツジの里、清和ホテルの里もあり、溪流の^{オウケツ}鵜穴にはギバチやウグイの魚が見られます。カエデの紅葉、ガマズミの赤い実など、野鳥の声とともに初冬の房総の自然に親しめます。

※3 ^{サンマガワ}三間川

(文 吉原洋氏)

三間川は小糸川の支流で、上総と安房を分ける山系の北側を源として、奥米地区を経て「国民宿舎清和」の近くで本流である三島湖と合流します。

名前の由来は、河床の幅が三間（約5、4m）あるからとのことですが、定かではありません。この川の魅力は「ドンドンの滝」など、段差の小さな滝が数多く連続していることです。この付近は房総では古い地層の清澄層で、比較的硬い層と軟らかい層が重なり合っています。地層の傾きと北に下る急勾配な川の流れが相まって、このような景観が出来上がったのでしょう。

春、高さ数十メートルの断崖に花開くミツバツツジや可憐なアワチドリ。初夏、ヤマブキの花と新緑。夏、溪流を泳ぐウグイなどの群れとせせらぎの音に伴奏されたカジカの鳴き声。そして秋の紅葉と、その時々を訪れる人々たちを楽しませてくれます。

※4 高宕川

(文 鈴木欣也氏)

高宕川は小糸川の上流にある支流で、高宕山山系を源とする水が谷から沢へと集まり、植畑と西日笠境の「日の出橋」下で合流しています。

流域は、八良塚、高宕山、石射太郎山の硬い岩盤の稜線を分水嶺とする東側の房総低山地で、年間降水量が2000mmを超え、天然記念物ニホンザルの生息地です。沢に沿い「林道高宕沢線」を歩いていくと、新緑の溪谷からさわやかな風が吹き上げ、流水の音も聞こえます。沢に下りると、蛇行する川の崖は断層や流水の浸食で深くえぐられ、泥岩と凝灰岩の傾斜した互層をなしています。河床には岩や礫が転がり、澄んだ冷たい水が流れ、くぼみにはウグイやサワガニが動き、カジカガエルの鳴き声や鶯のさえずりが谷間を渡ってきます。周辺は水源涵養林で、探鳥路や自然遊歩道、大滝、行者の滝もあり、ミズキやタマアジサイの花も見られ、豊かな自然に親しめます。

※5 梨ノ木川

(文 吉原洋氏)

梨ノ木川（地域での呼び名はナシヌイサワ）は、秋元地区の梨ノ木付近に源を発し、房総スカイライン近くの秋元大橋の下をくぐって清和公民館の対岸で小糸川と合流します。流路は約6km、川幅は約6mの小さな流れです。

源流から3～4kmくらいまでは大部分が砂質で、川底は泥岩の小さな石や砂が堆積しています。中流域から下流域の河床は、砂岩形の溝や小さな段差を形成しています。

くぼみには、ウグイやシマドジョウが群がり、夏には玉を転がすようなカジカの鳴き声が涼を誘います。流域にはゲンジボタルやヘイケボタルが神秘的な光を点滅させながら乱舞する場所もあります。川岸では、春にはミヤマハコベやニリンソウ、晩夏にはタマアジサイ、秋にはツリガネニンジンやワレモコウなどが目を楽しませてくれます。

(参考文献・資料)

- ・日本歴史地名大系第12巻『千葉県の地名』 平凡社
- ・土木学会関西支部編著『川のなんでも小事典』 講談社
- ・日曜の地学19『千葉の自然を訪ねて』 築地古刊
- ・菱沼勇・梅田義彦『房総の古名』 有峰書店
- ・君津町誌編纂委員会編『千葉県君津郡君津町誌』前編
- ・君津町誌編纂委員会編『千葉県君津郡君津町誌』後編
- ・坂田土地区画整理組合編『坂田郷土誌』
- ・君津市久保土地区画整理組合編『瑞雲』
- ・君津市中野土地区画整理事業記念誌『礎』
- ・君津市人見土地区画整理組合『「燦」人見郷土誌』
- ・杵師土地区画整理組合記念誌『むくし』
- ・君津市中富郷土誌編集委員会『なかとみ郷土誌』
- ・君津市市史編纂委員会編『君津市史自然編』
- ・君津市市史編纂委員会編『君津市史通史』
- ・石川昭論文「小糸川流路の変遷と中富村」

第1編

